

アメリカからの緊急レポート

日本の 錯覚

夜郎自大の
防衛論を斬る

Yoshiki Hidaka

日高義樹



112
H502
764

アメリカからの
緊急レポート

日本の錯覚

夜郎自大の
防衛論を斬る

日高義樹

FB

〈著者略歴〉

日高義樹（ひだか よしき）

1936年愛知県生まれ。1959年東京大学文学部
英文科卒業後、NHKに入局。外信部員、ワ
シントン特派員、ニューヨーク特派員などを
経て、現在、ニューヨーク支局長。

著書に『ペンタゴン』『ホワイトハウス』『星
条旗の秘密』『アメリカ・シンドローム』な
ど。

アメリカからの緊急レポート

日本の錯覚

——夜郎自大の防衛論を斬る

1983年9月1日

第1刷発行

著者 日 高 義 樹

発行者 江 口 克 彦

発行所 P H P 研 究 所

〒 601 京都市南区西九条北ノ内町11

TEL. 075 (681) 4431

東京事務所 03 (295) 9211

印刷所

大日本印刷株式会社

製本所

©Yoshiki Hidaka 1983 Printed in Japan

落丁・乱丁本の場合はお取り替えいたします。

ISBN4-569-21129-1

アメリカからの緊急レポート

日本の錯覚

——夜郎自大の防衛論を斬る

*目次

序章 日本の錯覚……………7

欧米では理屈が立たないことは存在しない

日本のジャーナリストの責任

欧米の戦略思考の本質

日本は錯覚の中でしか生きられないのか

第一章 世界の中の日本、大海を知らず……………19

米国の中曽根評価の中味

中東に見限られていた米国

レーガン政権と中東における米国の自信回復

理想主義・カーター政権の弱気

なぜF16の三沢配備か

「日本流」解釈の愚かしさ

劇画まがいの戦略論

「ひよわな花」日本の変化

夜郎自大は大怪我のもと

日本の自信と日米の衝突

第二章 米ソの陣とり合戦とシーレーン構想……………49

“不沈空母” 日本への期待

誤解された「シーレーン構想」

米ソの陣とり合戦への執念

「不沈空母」に対するソ連の恫喝

シーレーン構想の真意は何か

報復力こそ安全の核心

“軍事国家”・日本の深層心理

核抑止力の現実と可能性

第三章 米ソの核戦略は破綻している……………79

ジレンマに悩む超大国

なぜゲームをおりないのか

核を持つことの代償とは



核抜きパワー・ポリティクス
米ソの核戦略は机上の空論
核の番人・米大統領
ばかげたゲームもやはり現実

第四章 今こそ自前のソビエト分析を……………

107

防衛力増強とソ連の脅威
正体みたり、制服一着
軍拡一筋の国の無気味さ
米・欧のあいだの不協和音
どこにもいなかった同盟国
「脅威論」の通用しない国々
「ソビエト脅威」論は米国の内政問題
対ソ強硬論の仕掛人は誰か
亡命者たちの怨念
政治的ポーズとしての脅威論
徹底した米国の「クレムリン研究」

素朴な憎しみからの卒業を

第五章 日本人の摩擦アレルギー症……………137

「情報通」には要注意

ホワイトハウスの虚像

情報ギャップはなくならない

量では質を測れない

大統領と側近だけが政府

ワシントンはジャンゲルだ

面従腹背の「公卿たち」

銭だけが物をいう世界

ロビイストという怪物

摩擦があつて当り前の国

第六章 新しい防衛論の構築を……………169

戦争のうまくない民族・日本人

執念に欠ける国民性

“争い”は下手で“競争”は得意

現実感覚の喪失

国際社会の異質さを理解できるか

外国の政策担当者の日本研究はピカ一

テクノロジ―神話に踊らされるな

新しい防衛論の構築を

あとがきにかえて

序
章
日
本
の
錯
覚

欧米では理屈が立たないことは存在しない

アメリカ人はあらゆることを徹底的に考える。

去年の夏、私はコロラド州アスピンの山中で開かれたアメリカのエグゼクティブを対象とするセミナーに出席した。

アメリカ各界の指導者の立場にある人々が大勢出席したこのセミナーの狙いは「あらゆる現象を徹底的に討論しよう」というもので、「神とは、宗教とは」にはじまって、「民族の考え方」に至るまで、それこそ朝から晩まで、けんけんどうごうの論議が続いた。

このセミナーを通じて私はつくづく、この国の人々は「理屈で考えを組み立てる人々」なのだと察した。

彼らにとっては考えて理屈が成り立たないことは「存在しない」ということなのである。ソクラテス、プラトン、ヘーゲル、カントといった西欧哲学の考え方が日常の生活に密接に入りこんでいる。思想の内容がということではなく、「考える」という作業が、である。

「何故日本は保護貿易なのか」

このテーマに至るや、日本は徹底的にやられた。「保護貿易」の必要性を理屈でもって説き伏せない限り、相手は全く認めようとしなないわけである。

このセミナーのやりとりを通じて私は、西欧流ビジネスには惻隱の情とか、理外の理などというものはまるきり通じないことがよく判った。

理由のないことは「犯罪的」なのである。アメリカをはじめとする西欧、つまり私達が国際社会として相手にしている多数は、そういった「理屈が成り立たないものは存在を認められない」という考えを持った連中である。

防衛問題にしろ貿易にしろ、理をもって立たなければ認めてもらえない場所なのである。国際化が言われて久しいが、日本人は果してこのところを本当に理解しているのだろうか。

この夏にも大げさに言えばまたもや「国際社会の現実」にぶつかった。

ウイリアムズバーグで開かれた第九回の先進国首脳会議の直前、レーガン大統領ら参加各国のジャーナリズムとTV会見をすることになり、日本からは私が指名されて参加した。

TV会見の内容は参加するジャーナリスト達の自由管理にまかされることになり、日本、イギリス、西独、仏、伊、カナダの六カ国のジャーナリスト達が会見の進め方について前日、話し合うことになった。

質問の順番、初めの挨拶を誰がして、最後のしめくりをどうするか、などといったことについて話し合ったのだが、誰だって最初の質問をやりたいし、あいさつをやりたいがる。

結局多数決で、ということになった。

ところが採決するたびにいつもヨーロッパ勢は申しあわせたように全員が同意見、したがってカナダがそちらにつくと五対一、カナダが割れても四対二、まるきりこちらに分がない。

「おかしいじゃないか」というと、「これが民主主義の多数決だ」と言い返された。

ひよんな所で国際社会の厳しさを身をもって体験したわけである。

こうした「国際社会」の中でこの三十数年間我々は、西欧は味方でソビエトは敵と、漠然と考えて来た。

「どうして」といえば、ソビエトはわずか一週間ばかりの参戦によって日本から莫大な利益を奪い去り、大勢の日本人を捕虜にし使役に使ったばかりでなく洗脳した。

だが西欧、アメリカは飢えた日本人を助けてくれた。

これが大きな理由であつたに違いないのだが、誰もこれをとことんつきつめて考えたわけではなかつた。

もともと日本人は理屈が嫌いで、対人関係でも理屈っぽいのは敬遠される。それに戦後しばらくは「衣食が足りなかつた」せいもあつて、とても「理屈」までは頭がまわらなかつた。

それが最近になつて衣食も十分に足りた状態となり、さて国際社会での生き方を考える段になつた時、これまでのひっこみ思案がいつきよに裏返つて「夜郎自大」になつてしまった感がある。

「国際化ということは」といつた論が横行している割には、国と国のつき合ひの敵しさが知らされていらないから、仕方がないことなのかもしれないが、どうみても今の日本は、井のなかのかわずがひっくりかえつていばつているといつた格好である。

日本のジャーナリストの責任

これは一つには我々ジャーナリストの責任でもある。

というのは、これまで日本が国際社会の一員として責任を果たしてなかつた時期があまりにも長か

つたために、マスコミの報道も極めて評論的になってしまい、日本の立場とか責任を追及する姿勢を知らないで来たからである。

どこかの街でタクシートの運転手やレストランの持主としゃべっているだけの「特派員レポート」がまかり通り、外国でちょっとの間暮しただけのおかみさん達の身辺雑記が国際情勢の話と混同されて読まれて来た。

したがって今「防衛論」が必要になって来た時に、しかるべき論議がきちんと行われにくくなってしまっている。

「防衛論」というからには、この世界の大勢の中でどうやって身を守っていくか、という論議であるべきなのに、そもそもこの世界の大勢がまるでわかっていない。

わからせる努力が行われてこなかったから、わからないのは当然としても、このために「防衛論」そのものが成り立ちにくくなっている。

そんな中で、素人の眼からみた防衛論などというキャッチフレーズで劇画を楽しむかのような防衛論まで現れる始末である。

「素人論」は現在の日本文化の特色でもあるらしいが、防衛論はそんなまやさしいものではないはずだ。一歩あやまれれば国を亡ぼしてしまうのである。

核兵器の時代だから、先進国どうしの戦争はあるまいと日本の観念論的平和主義者は考えているようである。

だが私はそう楽観的ではいられない気がする。

「西欧」は理屈がなり立てば核を使う。「核兵器は地球を滅ぼしてしまう」というのならば、相手の核兵器だけを使えないようにしてしまおう、と考える連中である。

敵の核兵器を瞬時のうちに鉛にしてしまう中性子レーザーもそういった考えから生れた兵器である。さらには核兵器の上をいく兵器体系を考え出そうという人々である。

敵のミサイルを発射と同時につぶしてしまふ宇宙兵器・警戒体制などといったものも、全て「核兵器は使える」という前提から考え出されたものである。

「西欧」にとって究極兵器という考えはあり得ない。核は使うために存在し、兵器は際限なくエスカレートして行く。

その上おそろしいことに西欧人というのは、勝つためにはとんでもないことでも考え、実行する人々なのである。

欧米の戦略思考の本質

第二次大戦が始まる時までは、戦争が起きた時を想定して作られた日本とアメリカの戦略に、大きな差はなかった。

日本側は「漸減戦略」といって、アメリカの海軍力を日本列島にひきつけて少しずつ減らして行くという考え方を基本にしていた。

これを変型し（まるで変えすぎたという意見もあるが）、劇的に行なったのが山本五十六提督の真珠湾奇襲で、第一撃によってアメリカの太平洋における主戦力を叩き、時間をかせいで話し合いにも

ちこもうと考えた、といわれている。

アメリカ側はといえば、大西洋に展開している主力艦隊を、日本との開戦と同時に太平洋に移動させ、その戦力で日本を圧倒しようという「オレンジ・プラン」が基本的な対日戦略であった。

このプランの主戦力は海軍艦艇で、海軍力を使って日本の制海権を奪い、しめつけていくというものであった。

この点では日本もアメリカも同じ次元で戦争を考えており、この先はせいぜいが艦載機による機動部隊の戦争であった。

海軍航空戦力による戦法は日本側が先べんをつけたが、結局アメリカが強大な工業力にものをいわせて追いつき追いこしてしまったわけだが、ともかくこのあたりまでは、日本もアメリカも考えるところは同じであった。

ところが戦争が始まるとアメリカ側は、オレンジ・プランとはまるで次元の違う戦略爆撃という構想をつくり出し実行に移したのである。

日本側にも渡洋爆撃隊というものがあり、日本本土から中国大陸を爆撃したが、戦争に勝つための主要手段とは考えなかつたため、日本軍はこの構想に全力をあげなかつた。

ところがアメリカ側はこの戦略爆撃が、日本を徹底的にたたき、「勝つ」ための最良の手段であると見きわめるや、それまで長い間かけて築きあげて来たオレンジ・プランをさっさと捨てて、この新しい戦略に全力をそそいだのである。

B 29爆撃機を中心にしたアメリカの戦略爆撃隊の創設は西歐人が勝つためには、とてつもないこ

とを平気でやってのける人々であることの証拠である。

アメリカの首脳は太平洋を島づたいに日本列島に攻め込むという迂遠な戦法を嫌い、はるか遠方から一気に日本本土を爆撃できるB 29の建設にとりかかった。

海軍力で攻めつけるよりも航空戦力で日本を叩き屈服させることを決めるや、ただちに実行にとりかかったのである。

カンサス州の広大な草原をきりひらき、続々とB 29の工場をつくった。出来上ったB 29は地球を一まわりしてインド経由で太平洋に送りこんだ。飛行機ばかりでなく日本爆撃のために大量の爆弾を製造し、洋上むけの計器も考案した。

勝つためにはとことんやる西欧流であった。そしてついには核兵器を作り、使ったわけである。

日本にも風船爆弾という太平洋を越え、気流にのせてアメリカを爆撃しようという発想があったが、これによってアメリカを叩きつぶそうというような壮大な計画ではなかった。

もつとも勝つためには核兵器まで使う西欧人を、我々がとんでもないことをする人種とみるように、彼らは「神風特攻隊」のようなものを考えつく日本人こそとんでもない人種だと考えている。

戦争のやり方をあらゆる方面から想定して考え出されたアメリカ海軍大学のウォーゲームでも「神風特攻隊」のようなものは想定されていなかった。それこそとんでもない戦法であった。

だが戦略爆撃と神風特攻隊では「とんでもないこと」の次元が違う。

西欧流では「戦争に勝つため」ならば日本全国を破壊し皆殺しにしてしまおうというおそろしい次元にまで行きつくのである。